

「ごめん」「許して」の言葉はどこへ行ってしまったのだろう。人の心は機械ではない。万物の霊長たる人間、他の動物たちが笑う。人のため、世のため、国のために尊き汗と血を流して滅私奉公で頑張ってきた六十有余年、紅顔の美青年も何時しか頭は白くなり、漸く顔には年輪のしわが増え始めました。この「しわ」こそ人生の尊き体験と試練に打ち勝った最高の勲章である。

今も現役で山林労務長として緑の山と共に生あらん限り頑張るつもりです。

私の歩みを振り返って終わります。

軍隊生活の思い出

滋賀県 村木 茂

昭和十七年一月十日、私の生涯にとって精神的にも肉体的にも一番思い出になる軍隊生活の第一歩が始まった。入隊するその日まで在郷軍人として色々な訓練に参加させられ、いまにして思えばお経の方がはるかに軽い

軍人勅諭を純真なる心で「わが国の軍隊は世々天皇の統率し給うところ云々」と、便所にいくときも一生懸命に必死におぼえたものである。

伏見深草の歩兵第九連隊第一中隊に入隊することになった。入隊当日は日の丸の旗と歓呼の声に送られて張りつめた気持ちであった。中隊長は陸軍大尉宗林朝翁という方で、送って来た入隊者の家族の者たちも現在の戦況を十分説明され、その雄姿は今も私の目の底に記憶されている。着た物はすべて営庭で即時着換えさせられ、だぶだぶの靴に足をあわせと古兵にやかましくいわれるなど、むちゃくちゃな着換えで第一夜をなんとか、うとうとしたと思うまもなく起床ラップである。寒風吹きすさぶ営庭で鬼の住むような深草の初年兵第一日が始まった。また、消灯ラップや京阪電車の音を寝台のうえで聞き、涙を流した。軍隊はつらいつらいと思っただけでも仕方がない。親のことを思うのも、もはや観念して、純粹無垢な青年の心で、飯あげや演習、銃剣術、射撃と同年兵とひけをとらないよう自分なりに頑張った。

しかし人間の天性というか、生れながらの一徹という

のかその性質はかわらないもので、上官からいわれたことはその通り徹底的にやるということが一年後の野戦での私の運命をかえることになった。

四月初め、同時に入隊した現役の戦友たちは南方に出発した。宗林第一中隊長の雄姿を先頭に宮門を出る姿は、今も私の心の奥深くきざみこまれており、その時の気持ちはなんとも言えないものだった。武運長久を祈るのみだった。そして私は、四月十日除隊という意外なことになり、一応召集解除になった。

しかし女や子供以外は兵隊に行くような世相のなかで、勤めていても、毎日々が落ち着かない気持ちで、在郷軍人教育や銃剣術でしぼられていたが、ついに九月十日赤紙がきた。

野戦要員として第九連隊第十一中隊に入隊するため、以前に入隊した藤の森の歩兵第九連隊に入隊した。しかし輸送船も敵の潜水艦出沒でなかなか内地を出航出来なく、ようやく十一月はじめの朝まだ明けやらぬうち、広島県宇品で輸送船に乗った。もうこれでみおさめかと思ひ「帰り船」を口ずさんだ。小さいときに父親

をうしない、母親は一人で今日まで私を育ててくれ、入隊前には武運長久祈願のため、方々の神様に母とともにまいった。なかでも京都の愛宕神社にまいいり、私の好きな甘酒を母と二人でいただいた時の母の姿を思いだし、母一人子一人であった親の心はどんなであったろうかと、戦争の残酷さをいやがうえにも思わざるをえなかった。

しかし私一人でないのだ。日本国民として生まれた運命とわが心にいい聞かせた。

輸送船は瀬戸内海のおちらの島影こちらの島影とみえかくれしながら航行、中国大陸に直行することはなかったが、ある朝、日がさめると広い海原は水の色が黄色くかわっていた。それがいま思うと揚子江口通過というところで、そのときすでに野戦勤務にはいつていたので。上海の飯田棧橋に上陸して兵站で一夜を明かした。

まず驚いたのは、翌朝飯ごうを洗いにいくと、その残飯に手をだして待っている支那の子供たちがいて、はじめてそのみじめな姿をみた。

翌日、揚子江をさかのぼり安渡に上陸した。師団司令

部のあるところであるが、すこしの休憩で息つくひまなく、強行軍で第一線の沈村にむかった。

敵もこちらを望楼のうえから毎日監視しており、敵と対峙しながらの野戦教育を受けた。敵の弾丸がとんでくるところで身も心もきたえてやるという毎日の教育である。

銃剣術のある日、専任軍曹が「まだ貴様たちは軟弱だ。気合が抜けたる。この俺をどこからでも突いてきて倒してみよ」といわれたので、私も若気のいたりというか、真正直に受けて、「よしそれならやってやろう」と銃剣術の正攻法も十分知らない初年兵の私が突いて突いて自分の息が切れるほど突きまくった。そのせいかその先任軍曹がたおれた。教官や多くの兵隊がみている面前で初年兵の私にたおされたというお恥をかけたことに対して、さかうらみされて、それ以後私に対し中隊の如何なることについて「しうち」をされたことをいまだに感じている。

しかし自分は命令された通り一生懸命にやっただけで、仮にも下士官室の専任軍曹でありながらうらみに思

う方がよほど了見違いである。とんだ軍曹にひっかつたものだと思っている。

しかし運命というものは皮肉なもので、その軍曹は、以後の作戦において目を貫通される重傷をし、戦死したとか聞いた。

それより以前、一等兵でありながら私を連隊本部の軍旗護衛隊にほうりだせということになった。いまだ一等兵で護衛隊に分遣になった例はないのだったが、中隊長は私を初年兵教育の助手等にもしていただき、多少目をかけてくださったようだった。分遣にあたり「中隊を代表して行くのだから、しっかり勤務するように」と中隊長のお言葉があった。

連隊本部に行くと、各隊からは兵は自分と同年兵か、その後の現役兵であったか、思ったように一等兵というのは自分一人で、なかには私と同年兵で兵長も一人いた。

中隊を代表してきているのだから、星のカズは気にすることはないと自分にいい聞かせながら、中隊の名に恥じないほど頑張ったが、作戦等に出るまえ中隊か

ら送ってくる衣服は他の中隊から送ってくる同輩のものよりずーっと粗末なもので、巻脚絆等は中隊をうらむようなそまつな物だった。

分遣された者たちは忠実に勤務したためか、今までであれば六か月交代が慣例であったが、連隊長命令で交替の必要なしとなり、一か年半連隊本部に勤務することになった。

連隊本部勤務のままでの作戦で、わが連隊だけが敵に包囲されて、もう全滅のやむなきほどの戦闘にいたったことがある。何十機という米軍機の編隊が交互にかんだことなく機銃掃射、それに乗じて敵は増強し、がんきょうに抵抗し、小隊長の戦死など、つぎつぎに戦況の不利の報告があいつづいた。私の隣にいた戦友も急に頭をさげたかと思うと、頭部貫通銃創である。包囲した敵の狙撃兵に山のうえからやられたのだ。

もう袋のねずみ同様で、弾丸はなくなり、食糧もなく、絶体絶命と思いい軍旗を奉戴する我等は軍旗を焼却し、その灰を手榴弾でなくし、その後自決する覚悟を決めた。

しかし天の助けか、夕暮れになって友軍機が谷間に

ぬって小銃弾とカンメンパンを投下してくれた。本当にありがたかったが、投下された小銃弾には山肌の岩にあたって使用不能のものできた。

連隊長は意を決して夜間明かりをつけて包囲の敵をあざむき、地下足袋にはきかえ、息をこらして夜陰に乗じて脱出した。この時はもう一身を捨ててこそ浮かぶ瀬もあれ」という今までに一度も経験したことのない決死的な気持ちだった。

しかし連隊本部が脱出し、後に反転するのは容易でなかった。敵はすぐ察知し、徹底的に捕捉殲滅せんと兵力をどんどん増強し、一時的にせよ各中隊が人垣になって抵抗してくれたのだった。

私の原隊の十一中隊も全滅に近く、軍曹以下十一人になってしまった。

軍隊というところは連隊長命令ひとつで連隊の運命が左右される。それで私も原中隊にいたら完全に命がないものであるが、原中隊にいたときに私をほうりだした先任軍曹が目の貫通銃創で戦死し、ほうりだされたお陰で私はいのち長らえ、くわえて戦死者の増加による員数不

足でとんとん拍子で伍長に進級した。

八月二十三日、終戦の詔勅を聞かされた。その少し前に阿南陸軍大臣の最後の一兵まで戦えとのこと。これだけ潰滅的な状態になっているにもかかわらず、何という残酷なことだと腹立たしくなった。

一応中隊の皆の気持ちとしては内地に帰っても進駐軍がいて、今まで日本軍がやってきたことのように苦力に使われるだろうし、もう内地に帰らないと決定した。

だが、その後に情勢が好転したので、中隊全員、意志をひるがえし帰るということになったが、すぐ帰ることも出来ず、約一年ほどの捕虜生活が始まった。

また、長年中国においてあらゆる無謀なことをやってきた日本人に対し、蒋介石総統の「うらみをもってするに徳をもってすべし」と、何と温情ある言葉だろうか。

捕虜生活中も民家の仕事に人夫にゆき、真面目に一所懸命に働いて、毎日指名をもらい、毎日芋めしを腹一杯食べさせてもらって、病気に出勤出来ない同僚に私の配給分をまわしてやるなどして、復員の日を待った。

昭和二十一年五月二十三日、鹿児島港に入港、復員した。

戦争というものは二度としてはいけない。どうか世界の如何なる国、大きくはこの地球上から戦争というものを皆無に出来ないものだろうか。それをひたすら祈り、あわせて一口の冷水も口にすることなく、血まみれになって死んでいったあの友この友の、ありし日を偲び、心より冥福を祈りたい。

苦しい一等兵

広島県 平田昌次

昭和十七年十二月二十五日、父親と役場のかたにともなわれて入営、西部二部隊二中隊二班にはいったのが軍隊生活のはじめです。

小生は会社の外国部の仕事で中国に十七歳より兵隊にいくまで、四年近く働いていました。徴兵検査は上海で受け第一乙種合格でした。鎮江、楊州、秦皇、高部をへ